

(報告内容)

滑川市立博物館所蔵 高島高 著 『久遠の自像』『人生記銘』について

1、『久遠の自像』全体像について

奥付には左記のようにある。

非売品

印刷 昭和十六年十一月十五日

発行 昭和十六年十一月二十五日

著者 高島 高

発行者 北方の詩の会 富山県滑川市堺町八六六番地

印刷社 新夕 正朝 富山県滑川市河端町五三〇番地

印刷所 滑川謄写研究会 富山県滑川市河端町五三〇番地

構成 「序詩」 吉田一穂

「序に代えて」高島 高 昭和十六年九月二十五日

一、山脈地帯(全巻)

二、白銀繁生を悼む

三、寂光

四、孤独なる日記

五、山の秋

昭和十六年は、高島高が三十一歳の年。

伊勢功治『北方の詩人 高島高』の「年譜」によると、第二詩集『山脈地帯』を発行し、「帝大新聞」「三田文学」から好評を得ている、とある。このとき高は郷里滑川にて家業を継いで開業しており、北川冬彦編『培養土』や、『現代日本年刊詩集』『昆命詩集』等に詩を収録している。伊勢功治の「年譜」によると、「十一月 昭森社から出す予定だった詩散文集『久遠の自像』を開戦に続く応召により出版に至らず、謄写刷りで刊行(散文「寂光」)掲載。約三十部」とある。また、この年の十一月に父・地作が享年六十一歳で死去している。

東京を去り、郷里滑川にて父の後を継いで開業しながらも、自宅の離れを「北方荘」と名付けて文学の活動に取り組んでいる時期である。東京時代の文人ともつながりながら、「高志人」と関わるなど、富山でも新たな活動の幅を広げている。翌年には「高志人」の詩の欄の選者にもなっている。

しかし時代は戦争に向かい、昭和十八年には軍医として応召し、陸軍東部第四十八部隊石坂隊に入隊し、金沢陸軍病院出羽町分院に配属され、フィリピン、シンガポール、シヤム(タイ)、ビルマ(ミャンマー)を転戦する。

2、詩「山脈地帯 第一章」第十章」解題。

(解説)

詩集『山脈地帯』(昭和十六年二月二十日)には「第一章」のみが収録されている。この『久遠の自像』では残りの「第二章」から「第十章」までが収録されており、読むことができる。この詩はすべて物語風の長詩で書かれている。

ほとんどの章が、まずは風景描写から入り、次に思索の内容が述べられ、最後は再び風景描写に戻りつつもアトリエまでの雪道やアトリエ内での様子が物語風に進行していく。「風景→思索→風景・物語の進行」というフレームストーリーの形式をとっている。

(登場人物や動物)

「僕」

雪山に山小屋を持つ。絵描きを東京から呼び、北方の山脈地帯の絵を描かせる。この雪山の谷で亡くなった「健吾」なる天才画家を真の芸術家として尊敬している。また、雪山で遭難して亡くなった「美也子さん」とかつて恋仲であったことをほのめかす。

「美也子さん」

美貌の人だが雪山で遭難し、白骨化した状態で発見された。北の人々は子供を産んで死んでいくだけで、恋愛を恋愛として考えることもしない習俗の中に生きていたが、美也子だけは「考えた」という。しかし、山脈地帯では考える者は生きてはいけない。自然から復讐を受けた知的な人物として描かれる。

「君」||「柴尾くん」

東京から「僕」に呼ばれて山脈地帯の絵を描きにきた画家。中堅画家で将来を有望視されている。

「安岡健吾」

天才画家と称されるが、かつてこの山脈地帯の谷で命を落とした。「僕」や「柴尾くん」から尊敬されている存在である。

「作一」

山小屋の番をしている者。火をおこしたり犬糞の管理をしたりしている。「僕」の指示に従う。

「房太郎・房代」

雪に耐性をもった犬。房太郎が雄、房代が雌。「僕」から見て、その櫛を引く懸命な姿は美しく、また、咆哮する姿は原始の狼の血をたぎらせているように見えている。

(第二章)

詩集『山脈地帯』に載ったのはこの第一章のみ。高島高詩集『詩が光を生むのだ』所収の『山脈地帯』で読むことができるのはこの第一章のみ。あとは全て納得した完成度ではなく掲載されなかった。冷却の山脈地帯の厳しい寒さが描かれる。

全章が、「僕」が「君」柴尾くん」に語りかけるスタイルで進行する。二人は山脈地帯の中で一週間過ごし、その風土を詩に書いたり、絵に描いたりしようとしている。

かつて寒冷の山脈に入ってしまった「美也子さん」は、山脈が発する寒冷の刃によって命を落とし、白骨化した状態で発見される。なぜ「美也子さん」がそんな危険な行動に出たか、それは「考えた」からだという。生まれては死に、生まれては死に、という命のくり返しを自然の中で行う北方の習俗、つまり「自然」というものに対して、思考することによって自己を認識する「都会的な知性」との相克が描かれている。

「僕」と「君」柴尾くん」は不安定な雪の上をアトリエに向かう。

(第二章)

雪の世界のことを「北極」と呼び、そこに住む人々は「北極的魂」を持つとする。「僕」は不屈と暗鬱をまとった「北川冬彦」を尊敬している。「君」柴尾くん」との対話の続きである。

この山に住む人々は危険という文明を持っていない。本当の知性人は、危険すらも自分自身の中に消化して分別で頭をいっばいすることは無いという。怪しげな知性をひけらかしてはいけぬ。知性は一度投げ出されるべきであり、自己欺瞞や偽善から自由になることこそが大切なのだと説く。

二人は、吹雪の中、一歩ずつ小屋のアトリエに向かう。

(第三章)

場面はアトリエの中に移る。北側に窓があり、山を一望できる。

「僕」は、山の景色の中に「原始」の輝きを見る。そして、「原始」の中にこそ人間の本質があると言う。栄誉欲しさに嘘っぱちの人生を送ることほど無意味なことはなく、芸術の本質に食い入ることこそ重要だと説く。

「君」柴尾くん」を東京から来た優れた友人とし、冬の景色をキャンパスに再生してくれることを期待している。

(第四章)

画家の安岡健吾が登場する。安岡はかつてこの山で谷に落ちて死亡した天才画家であり、「僕」も「君」柴尾くん」も安岡のことを尊敬している。

「僕」は安岡の中にある「暗さ」を見だし、そこに魅力を感じている。その「暗さ」とは、「自己の節操と世間に容れられない自己に対する偉大な諷刺」によるものであり、「知性的にすぐれた男のもつもの」であるとして安岡の中にダンディズムのようなものを感じている。安岡の死さえも、「はなばなしの大制作」であるとする。けっして裕福ではなかった安岡だが、死してもなお思い出されることこそが芸術家としての勝利であると評価する。そして、「われわれ」芸術家は「一時でも身を売るときがあつてはならない」とする。そして、「君」柴尾くん」に安岡を呑み込んだ谷を描くよう依頼する。

(第五章)

犬橋を引く犬は樺太犬で体が大きく「犬の中の高島高」であると表現されている。雪に対する耐久力と感覚の一種を持っており、雄は「房太郎」、雌は「房代」と名付けている。この命名は「作一」(アトリエのある丸太小屋の管理者)による。二匹の犬が一心に橋を引く姿に男のあるべき姿を重ねあわせている。身を捨ててこそうかぶ瀬もあれ、と言う。犬の勤勉な姿から、人は筋金が入っていなければならぬ、骨組みがあるかが問題だ、とする。仮に世間から評価されずとも「無冠の大王」たるのが芸術家だとする。真の芸術家とは「同一的矛盾的自己をあくまで推し進める人」であると定義する。また「小乗」(個人的達成)ではなく

「大乘」(利他救済の達成)こそが大切であり、「魂を大乘的にする」と言う。

(第六章)

再び犬が橋を懸命に引く姿に感動し、協力し合い自分の仕事に全身全力を注ぐ姿に詩を感じている。そして、詩心のあるものには権威があるとすると、それに反して、無意味に威張りくさった外面ばかり気にする生半可な形式主義者は評価できない、とする。あらゆる夾雑物・外来物を排したわれわれ自身の赤裸々な意志こそが重要だとする。そして、安岡が死んだ谷に向けて橋を走らせる。

(第七章)

「××谷」は純粋芸術家である安岡の墳墓である、とする。そして安らかな死、眠りを祈り安岡を追悼する。「美也子さん」にしても「若い、しかも美しい肉体を捨てるために必死になって山へ登った」と「僕」は考える。そして「美也子さん」の行為を、「人間の純粋な肉体の詩」とする。

死を覚悟した人間の強さ、戦う力、奮戦力に感動し、房代(犬)の中には狼のような原始の力を見る。

(第八章)

一歩一歩歩むことで人間が鍛えられていくことの大切さを説く。人格・風格が備わり、ゆくゆくは「鉄の風格」と呼ぶべきレベルに達すると言う。日が暮れて山の夜が来る。自然の観察は古来から偉人たちがおこなうところであった。

(第九章)

山の夜明け。「原始」のひとつときとしてその輝かしい風景を評価する。夜が明けて光りが指す風景を、「復活した山脈」||「復活した人間の威容」と表現する。その朝明けは「哲学」の一部であり人間に「勇氣」と「覇氣」を与える、とする。

(第十章)

法(ダルマ)や理論にとらわれているうちは本物ではない。それらを越えていくことが大切なのだ、とする。風景の中にある「不動の真理」こそ、尊いのだ、とする。そして二人は山を下りる。

3、詩「白銀繁生(しろがね しげを)を悼む」

昭和9年7月19日に死去

高島高の詩集『太陽の瞳は薔薇』(昭和七年 私家版 伊勢功治『北方の詩人 高島高』P66-73に詳細な記述あり)にプロローグを書いた友人。

高の詩を白銀は「これは素焼きのやうな荒い肌だ／なぜかといふにかれの芸術が彼の気質に根ざしているからであらう」と評した。高は白銀のことを、若くして有為な才を抱いて死んだ親友であると、言っている。

この詩は、文芸と映画の雑誌「オアシス」編集部に依頼されて高が寄稿した追悼の詩である。雑誌「オアシス」は及川道子という女優について編まれた雑誌で、白銀は特別寄稿をしていた。

(詩の内容)

若くして寂しさと貧しさの中で死んだ白銀を悼む。

高は白銀の詩を「逆境と反逆と疲労で血塗られた血みどろの詩」と評している。愛人が去ったことに対する共感が詩に詠み込まれている。

洗足池畔をジイドを語りながら歩いた記憶。

高は自分の書斎の窓を開けながら繁生のことを思い出している。

「序に代えて」には「次の三つの散文『寂光』『孤独なる日記』『山の秋』は、二十一才から二十三才まで一篇ずつ某誌に書いたもので、何しろあまりに若い日のもので、おかしいが、長い間持つてゐた原稿だけになつて、少しおこがましいが、ここに一緒に収録することにした。」とある。

(第1段落)

テオドル・スエトルム(シュトルム)の「湖畔(インメンジー)」の老ラインハルトとエリザベートになぞらえて、失われてしまった恋について語る。

(第2段落)

春の北海、日本海に面した平和な漁村の海辺が舞台。

両親を失い15歳で叔父の家に預けられた少年・涓(けん)。大柄な身体であり多感で活発。しかし、いつもどこか寂しうにしていた。

涓が預けられた海浜の家の少女・従兄弟の町子は朗らかで幸福そうに笑う。

町子は涓にとって孤独を慰めてくれる唯一の存在であり、「第二の母」であり「たった一つの太陽」であった。少年は亡き母を思い、その面影を町子の中に重ねている。

ウィリアム・ブレイクの詩(おそらくは「無垢の歌」)がこの散文の中に通底音のように響く。

「ねむれ、ねむれ、幸あるわが児。

ありとあるものは眠りほほゑむ。

ねむれ、ねむれ、幸ある限り。

お前をのぞきこんで母が泣く間」

涓はたった一度でいいから母に抱かれて眠りたい、と願っている。

しかし、母はもういない。

(第3段落)

五年の月日が流れた。

ある晴れた夏の日。

M町小学校・A磯林間学校。

志村町子先生(町子の成長した姿)が登場する。

町子は県立女学校を卒業し、附属の師範学校に入学し、母校の小学校に奉職していた。

父から勧められた結婚をことわり、教職に就いていた。

(第4段落)

涓は東京の大学の文科に進み、灰色の詩人となっていた。

モーパッサン・チェホフ・ゲーテ・ダンテに親しみ、文学によって孤独を忘れようとした。そして、火のよう

に文学を愛した。

しかし、養家の叔父は文学などは享楽にすぎないと、文学研究を嫌っていた。

5

帰省するたびに涓と叔父は対立した。

しだいに涓は帰省したくなくなっていく。

しかし、町子は涓の文学研究を好ましく思っていた。

(第5段落)

夕方、林間学校が終わり子供らは家路につく。

町子が子らを見送ったあと、涓が現れる。

涓は感激に震える声で急に町子に会いたくなつたから帰省し、家には寄らず駅からすぐに町子に会いに来た、と言う。

町子は、帰省が遅いから心配していた、と涓を慮る。そして、先生という仕事が好きであることを涓に伝える。

涓は、大学を辞めて自分も働きたい、と町子に言う。現在の大学はブルジョア学生の冬眠場か享楽場にすぎないと言う。そして、文学は教室では学べない、文学はもっと真剣で自由なものだと言う。今の大学は文学を冒瀆している、とする。

それに対して町子は、学生生活は一つの道程であり、そのあとに大きな仕事待っているのでは、と言う。

涓はその町子の言葉に対して、試験場であるはずの大学には厳しさが足りない。プールで水遊びするような生活しかない。もっと荒波にもまわれたい、と昂ぶる。

町子は涓の向上心に対して「すごいね」と言い、しかし涓が昔に比べて「ニヒリスチック」で「懐疑的」になつたと言う。

涓は美しい町子との時間を慈しむ。都会にいるときも、幾度となく町子のことを思った。そして、大人になるにつけて、世の中が醜く嫌になつてきた、という。

町子はそれに対して「厭世主義者(ベシミスト)」と言う。

涓は自分の不遇な人生に対して自暴自棄になつている。

それから五年の晩秋。

(第6段落)

涓と町子は25歳になつている。

涓は大学卒業後、故郷から離れる。やるせない魂を新興詩壇に哀傷詩を載せることで癒やしている。

やがてお世話になつた叔父が死去し帰郷する。

涓はずっと町子のことを思っていた。

しかし、町子は3年前、他人に嫁ぎ、子供も生まれていた。

涓は傷つき、自らの過去を「青春の墓場」「幸福の墓場」ととらえる。

父母も、第二の母も失つた涓は死を思う。

(考察)

若くして母を失つた高島高自身が重ね合わせられている。

聖化されていく女性と世俗の醜さを対比させている。

「自分のもとを去っていく女性」(母・恋人)がモチーフとなつている。他の男性と結婚し、自分の手の届かない場所にいく女性像。(『伊勢物語』第四段「月やあらぬ」のよう)

失恋と自分の不幸な出自を関連させて現実を認識している。

近代詩において、去つて行く女性は多数描かれている。中原中也や萩原朔太郎などもまた、去りゆく女性に

ついての詩を書いた。

入院している「私」冬木の心境を書いた詩と散文が織りなす文章である。秋の寂しさと孤独感を入院している心境に重ね合わせて書かれている。看護婦である「美和子」は「私」冬木の孤独を慰めようとするが、「私」冬木は自分の寂しさと孤独感を「僕自身で慰めたいのです」と言う。難病にかかり明日をも知れぬ命を危ぶみながら「私」冬木は最後の詩作を行う。その詩には次のような一節がある。

私の心は空虚である。そしてその空虚の中に獣の如く死を呪う。そして亦神の如く死を愛す。
それだけが私の思想である。
それだけが私の最後の詩である。

衰弱して骨ばかりになっていく自分の腕を見つめ、秋の海の寂漠を感じながら思索がなされていく。看護婦「美和子」は「私」冬木を励まそうとするが、磯を散歩することもできないほど病状が思わしくないことを思い目に涙をためている。孤独に苛まれている「私」冬木だったが、美和子の存在に幸福感を感じてもいる。しかし、詩の最後には、

一切は終わりだ。
一切は砂上の宮殿だった。
人生は煙だった。人間は人間で終わるのだった

という諦念に至る。

(考察)

- ・登場人物名「冬木」は高のペンネーム「冬木牧人」と同じ。
- ・自らも病気にかかり療養生活をしていたことがあった高。そのときの想念が題材になっているか。
- ・医師として、病身の患者の視点を借りている。
- ・人生に対する悲観的な一面が比較的そのまま語られている。
- ・高島高の力強さ(男性的な一面)の裏側にあるものが垣間見られる。
- ・悲しみを通過したあとの「光」へとつながるか。
- ・高島高の強さ＝寂しさをバネにした明るさ

7

秋。樹の葉の雨が降る。魂の雨が降る。
恋に死んだ、魂の雨が降る。
女はかなしげに想を西に馳せ。
木立は虚空に、忘却の姿をかたどる

右記のようなグウルモンの詩で始まる散文である。

都会の喧噪を抜け出して無名の温泉場にたどりついた「私」不満と、反逆と、興奮に疲れた蒼白い都会の青年は、温泉場の人々の平和で純朴な微笑みに心癒やされる。都会には争闘があり、エゴイストがおり、沈鬱で断片的な生活があると言う。それを湯につかりながら癒やす「私」がいる。

さわれ山は自然だ。自然は神に近い
私は少年の様に無邪気なることを希った。無邪気に遊び、無邪気に笑った少年の日を私はじつと思ひ浮かべて浮かべてみた。

右のような一節から、「私」が心身を休めている様子が見て取れる。しかし、文中に挿入された詩には左記のようになるとおり、愛する女性を失った悲哀が語られている。その内容は「寂光」と重なり合うものである。

長い間孤独と戦って来た私の心は、
遠い幻の彼方の
愛に飢えてゐる。
愛のない人間程さびしい人間はない。
慰められるべき愛のない、冷たい人生の中を私はとぼとぼと二年、三年と歩いて来た。
幻の影を慕ふ純真なる感情がせめてもの濁り切った私の生活の中に、赤く咲いた一輪の花であったが。
久美子はどうとう結婚して仕舞った。

「久美子」は「私」の幼なじみで「陰鬱な北国の一漁村に咲いたうるわしい花であったのだ」と「私」に言わしめる。「私」は遠い燈明を眺めるように「久美子」の幻を見ながら生きてきた。そのような「久美子」は見知らぬ人の妻となり、「私」には手の届かない存在となった。「私」は恋心を「笑ひながら巷の赤い日に捨て」、誰を恨むこともできずに「狂人の様に久美子との運命を呪った」。そして、「愛の奪れた人生に、私は捨犬の様な寂寥を感じた」。そして、「久美子」への想いがエゴイステイックなものに変化することを恐れた。心が変化し、愛が憎しみに変わることを恐れた。

かつ「私」は「愛し合わねばならぬ男と、女が、時には冷めたい目でらみ合ひ、そしてそのまま永遠に別れていく例は少くない」と言う。

このような失恋の悲哀を抱きながら、山の秋を眺めつつ思索に沈潜する「私」がいる。その思索には「愛し合ひながら永久に別れ行かねばならぬ人達！／憎しみながら永久に離れ得る事の出来ない人達！」という対句的表現のアフォリズムが含まれている。

二・三日たつて麓の村から「千代野さん」が訪ねてくる。「千代野さん」はこの村一のインテリで、東京の女学校を出た人物である。東京で結婚して半年ほどで離婚し、永久に都会と結婚をあきらめた不幸な女性として描か

れている。そして「千代野さん」は詩を書き、「私」はその詩を東京の本屋の店頭に並べられた少女雑誌で眺めた、と言う。二十五歳で理的、かつ聡明な美しさを持つ「千代野さん」に「私」はほのかな好意を抱く

「千代野さん」はかつては自分も朗らかな女だったと言う。しかし、今は「自分は強い女」。わたくしはいつも自分自身に教えていますわ。ともすれば、寂しさや、悲しさや、悩みに負けそうな自分自身の心に。空虚や、寂莫や、不幸を私は征服したいんですの。……虚勢かしら。」とその内面を「私」にもらす。

「私」は哀愁をはらんだ「千代野さん」の美しさに触れる。と同時に、「千代野さん」が自殺するのではないかと心配にもなる。

「千代野さん」を送ったあと、「私」はひとり夜の山路を歩く。どこまでも、死の涯までも続く道のように感じながら「私」は歩く。過去の出来事は過ぎ去り、また現在を生きていく人間の宿命を考えつつ、思索の歩行が語られる。最後に挿入された詩には、

私は争闘を止めやう。

長い間しいたげられて来た、

反逆の心を捨てやう。

私は真直に素直に生きて行かう。

とあり、かつ、

私はもう泣かない。

二年、三年、五年と、私の生活は光の無い生活だった。

誰からも愛された事のない私は、

人一杯人なつくく生きて来た。

9

と、生きるための道化について書かれている。そして、山を去ることを決意する。

山を去る日、停車場に「千代野さん」とその美しい妹「町子さん」が見送りにきてくれる。「都会へ！再び都会へ！」という心の叫びとともに汽車は出発する。

(考察)

- ・北国の漁村の乙女が登場する点が「寂光」と類似。
- ・「千代野さん」は湯ヶ島での宇野千代の存在と類似。「私」を回復に導いてくれる存在。
- ・夜の保養地を歩きながら思索に沈潜する様子が、梶井基次郎「闇の絵巻」と類似。
- ・都会と山間地の対比は「山脈地帯」と基本的には同じ構図。
- ・近代日本にとっての「都会」というものの存在の大きさ。
- ・また、逆に「都会」が顕在化することによって見直される「山間部」の存在。高島高における〈北方〉や〈山〉は都会の存在があつてはじめて異彩を放つもの。そういった意味では、高島高の詩は都市化が進んだ近代だったからこそ生みだされた作品、とも言える。
- ・失恋の悲しみから回復し、再び都会に行く心の動きが「寂光」とは異なる点。
- ・「千代野さん」の妹「町子さん」は「寂光」の「志村町子」と同じ名前。

7、詩集『人生記銘』について

「序に代へて」の最後の部分には、「昭和十七年十月三十一日 故郷滑川町竹風庵にて 鷹鳴山人 高島高識」とある。また、

東京昭森社発行の拙著詩集「老子と僕」のコピイである。「老子と僕」は新制作派の内田巖画伯の装幀で、昭和森社よりそのうち出版される筈であるが、このコピイの中から選んだものが非常に多い。これらの多くは昭和十五年より、十六年、又中には昭和七・八年の頃からのものもあるが、十五年から十六年の頃のもの、その頃、最も自分に、発表の機会を与へてくれた。文芸雑誌「旗」「詩原」又春陽堂の「日本の風俗」らに多く発表した。所謂「北方の詩」以後の第二期的活動期のものである。

との記述がある。昭和七・八年は高島高が東京の昭和医学専門学校で学びながら詩を書いていた時期である。また、昭和八年は萩原朔太郎・北川冬彦・千家元麿・佐藤惣之助らが選考を務める詩コンクールにて「北方の詩」が一等当選している。

発表の機会を多く得て、より旺盛な活動を見せた昭和十五年・十六年は父が倒れて郷里である滑川に帰ったのちの時期である。富山県滑川にて自宅の離れを「北方荘」と名付け、医業と並行して旺盛な文学活動を始めていく。

つまりこの『人生記銘』には、東京で書かれた詩と、滑川に帰ってから書かれた詩が所収されている。どちらの時期も、高島高の人生にとっては大きな転換期である。高自らもここに収められた詩が自分にとっては「なつかしく必要な詩が多く、出版、今後の詩作らに、相当な役割を果たすものであると思ふ」と書いている。

(どんな詩が収録されているか)

1、恋愛の詩

若き東京生活での恋愛の詩。初々しくも悲しい詩が多い。

2、東京・横浜での生活そのものが描かれている詩

様々な地名が登場する。

日比谷・三田・田町・大岡山・横浜・横浜市電気局友愛病院・東京第一ホテル・馬込・荏原中延・池上電車銀座松坂屋・洗足池畔

3、思想的な詩

李白・芭蕉・ロダン・ゲーテ・老子などに触れている。

4、医師の視点で書かれた詩

横浜で勤務していた時代

富山の山間部の医療機関と思しき場所での勤務

医療用語

10

5、北陸の詩

直江津・北陸の祭り

6、戦時を思わせる詩

「劔の夜明けに」・・・大東亜共栄圏等、アジアの発展を描く

7、富山を描いた詩

宇奈月・滑川・滑川街道・和田の浦(滑川の海岸)・魚津中学・水橋・富山電鉄電車・剣・立山・常願寺川・針原・滑川商業・水産学校

8、心象風景を描いた詩

春・秋・山など、季節や風物によせて

9、他の詩人の影響が見受けられる詩

宮沢賢治・石川啄木

10、身内の死を描いた詩

妻と子どもの妹・敦子の死を、宮沢賢治の「永訣の朝」風に描く。
弟・明大の死。
父・聴濤庵半茶の死

11、人物に関する詩(思想に関する詩と重複する)

李白・芭蕉・横山大観・ロダン・ゲーテ・利休・老子・大伴家持

(考察)

第一詩集『北方の詩』は、北国の厳しい寒さをモダンイズム風に切り取り、誰が読んでもそこには一枚の写真に収められた寒冷の(北方)が現前するように書かれている。テーマも(北方)に統一されており、読む者に高島が生まれ育った富山を想像させるものがある。ちなみに、『北方の詩』には具体的な富山の地名はほとんど出てこない。

しかし、『人生記銘』は『北方の詩』とはまったく異なった方法で書かれている。そもそもテーマが多岐に分かれており、(北方)の詩人・高島高の多様な一面が垣間見られるように構成されている。恋・故郷・東京・文学・医学・季節・思索・思想家や詩人達・近しい人の死など。これらはすべて高島にとって看過することのできない、それぞれに重要なものであったことがよくわかる。

テーマにあわせて詩の言葉も緩急使い分けられている。語りかけるような口調のもの、簡潔な言葉でまとめられたもの、医学の専門用語を交えて当時の様子を具体的に描写したもの、宮沢賢治の詩法を取り入れて書かれたもの、などなどである。

『北方の詩』の世界を超えていくために必要な詩集だったのが『人生記銘』であった。高にとっての折々の人生の場面を慈しむように描いた詩が多い。

11

人生記銘

高島 高 著

12

人生記銘

序に代へて

これは、東京昭森社発行の拙著詩集「老子と僕」のコピーである。「老子と僕」は、新制作派の内田巖堂伯の装幀で、昭森社よりそのうち出版される筈であるが、このコピーの中から選んだものが非常に多い。これらは多く昭和十五年より、十六年、又中には昭和七、八年の頃ののものもあるが、十五年から十六年の頃のものは、その頃、最も自分に、發表の機会を與へてくれた。「文藝雜誌」・「旗」・「詩原」又春陽堂の「日本の風俗」らに多く發表した。所謂「北方の詩」以後の第二期的活動期のものである。尚、最近の詩をまとめて、やはり内田巖堂伯のカットで、「神洲述志の歌」が、上梓されるはずであるが、「老子と僕」「神洲述志の歌」の二冊が刊行されるのは、自分としては又新しい境地をもとめて、碎骨せぬばならぬと思つてゐる。いづれにしても「人生記銘」と名付けた、このコピーの詩は、本になる「老子と僕」と共に、自分としては、なつかしく必要な詩が多く、出版、今後の詩作らに、相当な役割を果すものであると思ふ。これを書いてゐるうちに自然とこんな自作の俳句が思ひ出されて来た。

旅人に銀杏の落葉にしがらみ

卯の花は水車の水うこぼれけり

13

禪寺のしづけき夜や月見草

花の深奥かた一芒の花

愛回く仔猫かくるる夏の森

これらは、何か、これらの詩に附録があるものであろう。

昭和十七年十月三十一日

故郷清川町村風庵にて

高島山

高島 高嶽

目次

序に代へて

第一部

早春の譜	一	心象の窓	一四
白鳥	二	横浜の病院坂訪	一五
抒情歌	三	義妹敦子臨終	一七
ひととなり	三	亡弟明大追慕	一八
大岡山今昔物語	五	妻と思想	二〇
直江津挽歌	六	新 春	二〇
剣の夜明けに	八	菫 委	二一
春	九	秋 日 節	二二
李太白	一〇	秋の小川	二三
李太白が贈内	一一	父 逝 去	二五
寒 暁 待 車	一一	守 奈 月 に て	二六
山の嶽巒折	一一	別 れ	二七
		雄 獅 子	二七
		横山大藏頌	二八
		下 山	二九
		調査終了日	三〇

14

東京第一ホテルにて

日本詩

第二部

口ゲンと彫刻	三九	月 明	五一
假 面	三九	魚津中學校遊	五一
輝くばかりの明眸	四〇	町祭りの今記	五二
古枯と庭	四〇	深 淵	五三
春と新仕	四一	歌 筆	五五
病 院	四二	ある墓碑銘	五六
生 存	四三	銀座松阪屋上より	五七
ゲ ー テ	四四	夢の降る感情	五八
和田の浦	四五	いのちの森	五九
生 活	四六	夕 暮	六〇
横浜旅情	四七	小 駅 待 車	六〇
馬込の冬	四八	何んでもない春	六一

15

春と清川

故郷の歌

人生理法

利 休

老子出陶

U温泉地にて

ある年の日記より

浦にて

祖先の墓

曇 日

花と雨

田園抒情

ある日の家持

明るい屋影

早春の語

恋

雨もびしゃびしゃ降つてゐるし
 本當に小麥の芽も眞青で眞直ぐで
 幾分白い莖も見えて
 その上土の黒さはごく特有だ
 空も水玉灰色で
 こんな四方田圃ばかりの雨の道を
 歩くといふことは
 けつして僕個人の趣味ではない
 もちろん
 これは二人のカルチユアの性質によるのです
 そして感情の交感
 恋だといふのは
 あなたにも失禮です
 又恋愛の表面化は

こんな景色には俗すぎます
 あなたの白い足袋に
 小麥の芽が眞青にうつるほど
 こんな明るい雨の日に
 何故二人は少し暗くうなだれながら歩かねばな
 らないのだらうか
 として
 こんなに永遠に向ふ二人の感情は
 これは人生以上の人生でせうか
 しかしこれはたしかに
 人生の記録の一つの證書に違ひありません
 未来が本當に偉大な肉体の詩を書くやうに
 ああ恋愛の端はこんな内に燃えはぢめま
 すとへばあなたの肉体の一部を
 僕の身体があつかつてゐるやうに
 これではやすらがすぎてさびしいのです

あんまり明るすぎてかなしいのです

白鳥

中

蓮の影
 よどむ水の面に
 白き火を燃し
 白鳥は行く.....

かゝる日の
 かつてありしや
 かゝる日の
 恋しと思ふ
 百花園
 花咲き乱れ
 噴水の
 うつろなるひびき
 日は谷なる
 公園のベンチに
 池をみつめ
 一人ありしか
 白鳥は静かに
 かなしく

水の面をすゞり
 われを慰む

—古き手記より

抒情歌

恋

われは孤独の旅人なりし
 三田の下宿にひとり憩へるころは
 進むべき道もなく愛すべきすゞもなく
 たゞうつろは日々を送しか
 華やかな街の灯夜々にまだ、けど
 われは孤獨な旅人

一篇の詩に傷心をなぐさめ
 華やかな街の中を孤独に歩めり
 思ひ出はかなしくつきせず
 今も尚田町の驛驛然としてありや
 われの限りなく愛せし
 三田の人懐健在なりや
 —古き手記より

ひととなり
 夜でも晝でもといふのは少し欠けさだが
 何しろ僕は書生であり自分の授業ももつてゐた
 ので

雪は松葉の間から
庭道のすき間から
暗くて輝いた天の中心から
そのわづかに光る間から
(庭の松の木の影もすつとのび)
僕のしやがんである縁側の廊下も
冷めたく古い家系に光り
松も昔の夢にふけり
はるかに川も山もつめたい水晶色の膚へをもち
草田男の
降る雪や明治も遠くなりにけりの匂を
つい重々しくも思ひ出す
……思想はよみがへりしかも冷めたく燃えなが
ら

(雪はたゞ真綿のごとく降るばかり)
(その一点は火の物理)

新春

春

街道の松並木の緑葉に映える白雪ら
遠く山脈は北から馳けり去り
海の日の出をはるかに見かへる
灰色の極彩はあまりにあざやかな波つてある

雪や小虫にとりまかれ
——ああ解脱、強さ
人の世をあくまで強く生きんとする思想の夢で
も見やうといふのか
なる程後世(芭蕉)もなつた
——死にもせぬ旅寝の果や秋の暮

雪の影

雪にはいろいろあるんだな
紺色の雪もあれば
薄墨色の雪もあるんだ
野を透く夕暮れが来て
山脈の頂には
まるで放愁のやうな
芭蕉
男の中の男の面行が
いつのまにか

秋の夕暮れの野末の小道を
ひとりとはとぼと迎える旅人となり
風や草木を友として
今宵も月に涼轡を鳴き
あの山麓の草原を宿とするか

ロダンと彫刻

ロダンについてはすぐれた人々が
たくさんいることを言ひすぎておます
ところで僕はロダンの彫刻がその
眼窩の陰影にあると思ふのです
たとへばかの「考へる人」について
ロダンは自分の心の陰影をもつて
モデルたちをはつきりみつめるからです
それはたしかにモデル自身がモデルではなく
ロダン自身がモデルになつてゐるのです
こ水らがすぐれた精神の二相系の一部で
時空的制限をのりこした
理性のひびきの一輪でせう
彼はきつとこら咳いたと思ふのです
(ノミよりおれの方が鋭すぎるのだと)

芸術論

いゝ心の方が鋭すぎるのです

假面

假面をかむると踊りたくなる
假面はかなしい悪魔です
僕はいつまでも假面をかむつてみたい

人
ハルシオ

もつとむなしくさみしいものであつた

二重瞼のすんだ瞳は

哀愁よりほかに取り扱がなかつた

そして幾度もひどく咳こんでは血を吐いた

幾年かたつた

S子は死んでしまつてゐた

僕はやはりむねしい季節の風の中をそのこと
一人で歩いてゐた

ゲイテ

わがつねに生きる光ゲイテ

それは消えない

永遠に人の心に勇氣と平和をあたへる光
偉大な光

光の偉大さの故にあたゝめられる偉大なる世界

彼には人生そのものは文學であり
而して文學は世の全てを解決することを示す

彼にとつては意志は太い行路であり
そこから世界が見えてゐる

「この道をくぐるがよい」

ゲイテはあたゝかく微笑んでさしまなく
君にして人生が不幸だと思つたら
それを思つてゐるそれ自身が一つの幸福なので

和田の浦

わがふるさとと思ひ出の海辺

古戦場といふと

唸りとぶ羽矢や金ピカの鎧や關の聲を思ふ出すが

幾百年の脚影が消えて

白砂を洗ふおたやかな波と

はるかにつゞく緑松の林が

僕には平和な幼日の牧歌を埋めてゐる

たしかにこの手につかんだ一握の白砂ら

君や僕にはもう

あの頂は再びめぐつてこないだらうか

高い松が枝にとまつてゐる鷺の親子の瞳には

はるかにつゞく北アルプス山脈の頂上の黄昏の
雪が映り

遠く能登半島に沈む眞赤な入日を見て

君も僕もわけもなく泣いた

※和田の浦は一名和田の浜とも言ひ故郷浦川
町外にあり、白砂緑松の美しい海辺なり。

僕は少年の白よりひそかにデュヌンの詩に

似てゐると思つてゐる。そして又わが少年
の日のいみじき遊歩の地なりき。

四六

生活

流れには底がある

底知れぬのうがかり渦巻く

あゝ深いなあ

馬場の冬

東条馬場

葉を落した裸の木々の並ぶ丘つ

立の山に来ると

詩人のNがきつと言つた

「ああ水たちは死んだやうだ」

空は廣く程灰色鉛で風も寒く

この田園をめぐるとの水も

こんな色彩に光るために

五

四七

裸木の影々を映してゐる

沼地の水は

時に死んだやうだともきこえるかも知れない

それはNだけの思想ではなく

文学の思想だと思ふ

そして「正月がもうすぐくるのさ」と

考へながら

暮近い冬枯れの馬込の田圃や丘を

矢暮の横らはつれなつて黙々とよく歩いた

(考へればこれはあまりに薄い思ひ出だとも考へる)

新都市の真

中

あな影が明るすぎるのを魚屋の初さんが真裸で水を撒いてゐる

誰だつて裸でゐたいのだけれど

ワンピースの娘さんやワイシャツ一つの紳士や

又はあんな貴夫人ぶつてゐる人が

大きな帯などしめながら

薄紺色のパラソルなんか

かして

影と日向の明るいとところを

しのびやかに歩いてくる

白い素足

洋品店の

日除けをした

シヨウウインドには

最近流行の大柄横ネクタイ

水色ワイシャツ

日向と影の明暗見せて

新興都市の商店の屋根屋根つゞく

今中延中央の踏み物りを

驟然と池上電車が走つて行く

新都市の真中
新興都市の商店の屋根屋根つゞく
今中延中央の踏み物りを
驟然と池上電車が走つて行く

22

ある年の日記より

わが友小西紀生君

丸坊主長身の醫師

形象的には直水三十五

彼と僕とは

かつて浅足地野の散策を愛し

トリコロールのコーヒを愛し

バルザックの小説と

レミドグルモンの詩を愛した

浦にて

——浜加積高塚浜にて

あんなに

いぶし銀の雲が

立ちならぶ高い松の古木の梢らにひつかかつて

海の色が

濛いエメラルドで

波の敏は

くづ糸のやうに

細く切れたすく灰白色なのは

やはり

あんまり今年の梅雨が長すぎて

気圧が

充分に解れられないために

季節風が

今も

彼らのすぐれた祖先の事蹟を思はず

適當してゐるやうに思ふ

だが今はこの浦には誰もゐないので

僕は一人あつちこつちを歩きながら幾年前かの

ここでの若い日の

出来事を胸に刻むやうに思ひ出してゐた

23

四九

七一